

「絶滅危惧器具(1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

30年以上も理科教師をしていると、実験室の器具もずいぶん変わったなあ、と思うことがある。「モノコード」(弦を弾いて音を出す実験道具)や、「衝突実験器」「輪軸・滑車」など、単元や内容の削減・移動が原因で、すでに消滅している器具も多い。中には、もうすぐ教科書から消えるのではないかと心配される器具・・・「絶滅危機器具」も存在する。その代表例が、「上皿天秤」と「アルコールランプ」だろう。



「アルコールランプ」・・・この「美しい実験器具」は、私にとっては「原風景」とでも表現できる、なつかしい存在だ。私が小学生の頃の理科授業では、アルコールランプを使った実験が多かった。中には、丸底フラスコの中を少量の水を熱して水蒸気で満たし、その後密閉して冷却、中を真空にして「鈴の音が聞こえなくなる」なんていう、すばらしい実験もあった。今では演示実験すらためらう、非常に危険な実験だ。

ところが千尋少年は、小学校低学年の時に、すでにアルコールランプを持っていた。当時は、新宿の京王デパートの玩具売り場の片隅に、「実験道具売り場」なる珍妙なものがあって、そこで大抵の実験器具、驚くべきことに薬品まで手に入ったのだ。



「8歳の千尋少年」 あだ名は「チーチ」
となりの女の子は「みほちゃん」 水筒がなつかしい
小学校の多摩動物園遠足 / 昭和47年

まさに私のような「化学少年」には、夢のような売り場だった。私は京王線で都内に出るたびに、母にねだって、実験器具を買い揃えていったものだ。中でもアルコールランプは必需品だった。燃料用アルコール(メタノール)は、子どもには売ってくれなかったのので、家にあった消毒用アルコール(エタノール)で代用していた記憶がある。

そんな愛すべき実験器具「アルコールランプ」は、現在絶滅の危機に瀕しているようだ。小学校の理科室から、消えるかもしれない存在なのだ。



アルコールランプを絶滅に追いやろうとしているのは、コイツだ。「実験用カセットこんろ」---正確には「実験用カートリッジガスこんろ」という。ちょっと前まではほとんど見かけなかったが、今はどの学校の授業を参観しても、必ず実験戸棚に収まっている。残念なことに、この実験用こんろ、多くの点でアルコールランプよりも優れている。